

# 相生町における縄文遺跡の研究

考古班（徳島考古学研究グループ） 幸 泉 満 夫<sup>1)</sup>

## 1. 調査の経過

期 日 2000年7月29日(土)～7月30日(日)  
調 査 員 幸泉満夫、中村豊、柏野壽一  
調査協力 本田義順、高島芳弘  
内 容 縄文時代遺物散布地点の現地調査、ならびに本田義順氏採集資料の整理研究

## 2. 調査の経緯

相生町では1990年～1992年にかけて徳島県立博物館の課題調査として高島芳弘氏、ならびに那賀川流域の縄文遺跡調査グループ（天羽利夫、亀井節夫、中尾賢一、魚島純一、阿部里司、北條芳隆、柏野壽一、三宅良明、寺戸恒夫）によって縄文遺跡の分布調査が実施された。この結果、従来縄文遺跡の存在が全く知られていなかった相生町において計16ヶ所の遺物散布地点が新たに確認された。上記の研究成果の一部は1995年にすでに公表されている<sup>(1)</sup>。また地元相生町において1989年～1997年までの約9年間、余暇を利用して遺物の表採に努められてきた本田義順氏の約1万点におよぶ採集資料（延野大原遺跡、鮎川西ノ宮遺跡、谷内A遺跡、谷内B遺跡、中分遺跡、西納遺跡、請ノ谷遺跡、築ノ上遺跡等）はこの時の調査に大きく貢献している。

現在、県立博物館の高島芳弘氏を中心として上記の調査グループ採集資料ならびに本田氏採集資料のうち縄文土器片、製品を中心とする石器群の整理研究がすすめられている。従って今回の報告は本田氏が採取された延野大原遺跡、鮎川西ノ宮遺跡、谷内A遺跡、谷内B遺跡、中分（谷内C）遺跡、西納遺跡、請ノ谷遺跡、築ノ上遺跡の資料のうち、現在県立博物館が研究を行っている縄文土器片、製品を中心とする石器群を除く、石器剥片・碎片・石核・二次加工ある剥片の一部・使用痕ある剥片の一部に限定する。

---

1) (財)徳島県埋蔵文化財センター研究員

### 3. 遺跡の概要

相生町は徳島県南部の秩父累帯上を東西に流れる那賀川の中流域に位置する。那賀川中流域は特に河川の蛇行が発達した地域であり、川沿いには多くの河岸段丘が認められる。遺跡はこの本流沿いの河岸段丘上、ないし那賀川本流へと合流する谷内川、紅葉川、陰谷川などの支流に沿う河岸段丘上に位置している(図1)<sup>(2)</sup>。

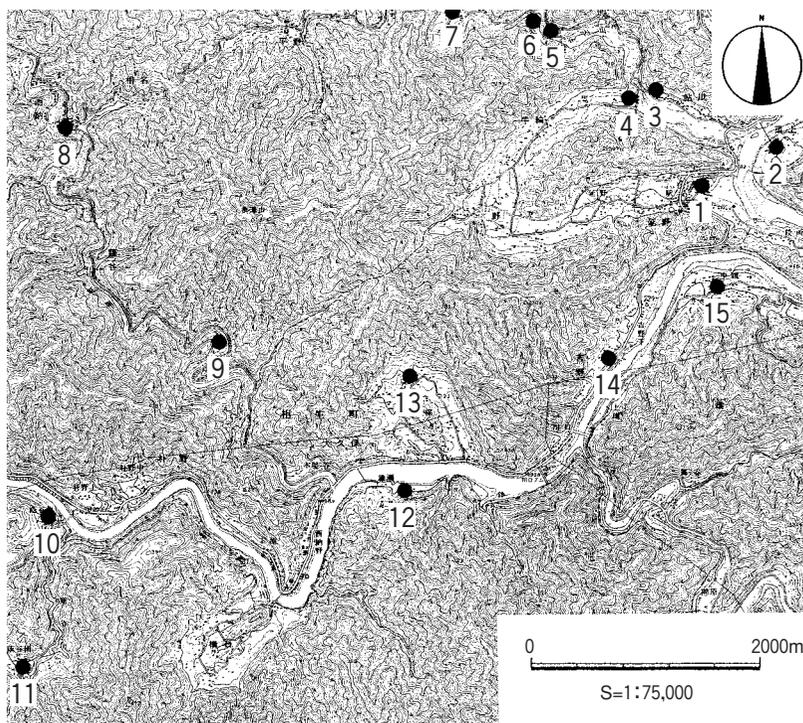


図1 遺物散布地点(国土地理院発行『桜谷』を基図に作成)

- 1 延野大原 2 築ノ上 3 鮎川大国 4 鮎川西ノ宮 5 谷内B  
6 谷内A 7 中分(谷内C) 8 西納 9 請ノ谷 10 蔭谷北  
11 蔭谷南 12 横石鎌瀬 13 大久保森原 14 吉野川口

#### 1) 延野大原遺跡(図1-1 相生町延野字大原250-1(ほか))

那賀川本流へと流れ込む小河川右岸の河岸段丘上に位置する。標高は約80m前後、河床からの比高差は約15m前後である。現在の相生中学校の北側に隣接する畑地を中心として東西約350m、南北約200mの範囲で遺物の散布が認められる。

本田氏採集資料として縄文土器の可能性の強い無文の胴部微小片2点、サヌカイト剥片・碎片207点、チャート剥片・碎片26点を確認した。ただしチャート剥片と認定したものには残核の可能性のある資料を含んでいる。

なお高島氏の報告ではサヌカイト製ナイフ形石器1点、チャート製ナイフ形石器1点、サヌカイト製石鏃13点、サヌカイト製石錐1点が紹介されている。



写真1 遺物散布状況

## 2) 鮎川西ノ宮遺跡 (図1-4 相生町鮎川字西ノ宮135ほか)

旧河道上を流れる小河川と谷内川とに挟まれた河岸段丘上に位置する。標高は約80~90m、谷内川河床からの比高差は約10m程度である。

北西から南東方向に延びる尾根状地形の先端部、河岸段丘の頂上付近を中心として東西約150m、南北約150mの範囲で遺物の散布が認められる。特に現在ケイトの栽培が行われている畑とその周囲の水田において多くの遺物が採集されている。



写真2 鮎川西ノ宮遺跡全景

本田氏採集資料では縄文土器の可能性の強い無文の胴部微小片6点、古代ないし中世とみられる土師器杯または皿の底部小片1点、使用痕あるサヌカイト剥片2点、サヌカイト剥片・碎片4353点、サヌカイト石核1点、使用痕あるチャート剥片3点、二次加工あるチャート剥片1点、チャート剥片・碎片702点、チャート石核5点、珪質頁岩剥片7点、水晶剥片・碎片9点を確認した。ただしチャート剥片のなかには残核の可能性のある資料も含まれている。

高島氏の報告では縄文土器片9点、姫島産の可能性がもたれる黒曜石剥片9点、石鏃566点(石材不詳)、石錐27点(石材不詳)、サヌカイト製石匙1点、スクレイパー74点(石材不詳)、楔形石器25点(石材不詳)、切断調整石器3点(石材不詳)、石錘1点(石材不詳)、磨石1点(石材不詳)の存在が紹介されている。このうち縄文土器片はいずれも小片であるが、前期初頭の羽島下層式とみられる小片2点、後期前葉の福田K2式とみられる小片1点、後期後葉の馬取式、ないし宮滝式とみられる小片1点の拓影が掲載されている。

## 3) 谷内A遺跡 (図1-6 相生町谷内109ほか)

谷内川右岸の河岸段丘上に位置する。標高は約100m、河床との比高差は約5~10mを測る。遺物は東西約100m、南北約100mの範囲に散布していたらしいが、リゾートホテルウインテック相生の建設に伴う整地が行われた際に遺跡のほぼ全域が消滅しており、詳細は不明である。

本田氏の採集資料にはサヌカイト剥片・碎片27点、チャート剥片・碎片926点、チャート石核6点がある。ただしチャート剥片に分類したもののなかには残核の可能性のある資料が含まれる。



写真3 谷内A遺跡の現状

高島氏の報告ではサヌカイト製石鏃17点、チャート製石鏃8点、黒曜石製石鏃1点、スクレイパー14点（石材不詳）、楔形石器2点（石材不詳）の存在が紹介されている。

#### 4) 谷内B遺跡（図1-5 相生町谷内字下傍示215ほか）

谷内川左岸の河岸段丘上に位置する。谷内A遺跡とは谷内川を挟んだ対岸にある。標高約100m、河床からの比高差は5m未満であり、相生町において現在までに確認されている他の河岸段丘上の遺跡に比べ、比高差が少ないのが本遺跡の特徴の一つといえる。遺物は畑地を中心に東西約30m、南北約80mの範囲に分布している。



写真4 谷内B遺跡近景

本田氏採集資料にはサヌカイト製ナイフ形石器1点、サヌカイト剥片・碎片302点、チャート剥片・碎片38点、チャート石核2点がある。なおチャート剥片には残核の可能性がある資料も含まれる。

このほか高島氏の報告では縄文土器片2点、サヌカイト製石鏃34点、チャート製石鏃5点、サヌカイト製石錐1点の存在が紹介されている。縄文土器は無文の胴部小片1点、条痕文の胴部小片1点であり、時期比定は困難である。

#### 5) 中分（谷内C）遺跡（図1-7 相生町谷内字中分129ほか）

谷内川左岸の河岸段丘上に位置する。谷内A遺跡の西方約750mにあたる。標高は約110～120m、河床との比高差は約5～10m程度である。遺物は畑地を中心として東西約100m、南北約100mの範囲に散布している。

本田氏採集資料としてチャート剥片・碎片548点を確認した。なおチャート剥片と分類したものには残核の可能性がある資料を含んでいる。

#### 6) 西納遺跡（図1-8 相生町西納字大張42ほか）

西納小学校の南南東約450m、紅葉川が左岸側に向けて大きく蛇行する河岸段丘とその対岸において遺物の散布が認められる。標高約180～190m、河床からの比高差は約5～10m程度である。遺物は水田を中心として東西約200m、南北約100mの範囲に分布している。

本田氏採集資料では縄文土器の可能性の強い無文の胴部微小片8点、サヌカイト剥片・碎片1701点、チャート剥片・碎片184点、水晶剥片・碎片3点を確認した。ただしチャート剥片と分類したものには残核の可能性がある資料を含んでいる。

高島氏の報告では黒曜石剥片1点、サヌカイト製石鏃36点、チャート製石鏃6点、サヌカイト製石錐1点、スクレイパー1点（石材不詳）、サヌカイト製楔形石器1点、黒曜石製楔形石器1点の存在が紹介されている。

7) 請ノ谷遺跡 (図1-9 相生町請ノ谷字定道12ほか)

西納遺跡から南東約2350m、紅葉川をさらに下ると請ノ谷遺跡に至る。遺跡は紅葉川の右岸、北東方向に延びる舌状の尾根地形先端部における河岸段丘上に位置している。標高は約190m、河床からの比高差は約10mである。遺物は水田を中心として東西約100m、南北約100mの範囲に分布している。

本田氏採集資料ではサヌカイト剥片・碎片3点、チャート剥片・碎片9点を確認している。なおチャート剥片に分類したものには残核の可能性のある資料を含む。

8) 築ノ上遺跡 (図1-2 相生町築ノ上字中筋27-1ほか)

延野大原遺跡とは那賀川を挟んで対岸に位置する那賀川本流右岸の河岸段丘上の遺跡である。標高約50~70m、河床との比高差は約15~20m程度である。遺物は東西約450m、南北約250m内の水田、ないし畑地を中心に広く散布している。特に、かつて西法寺の所在したとされる地点での密度が高い傾向にある。

本田氏採集資料には縄文土器の可能性の強い無文の胴部微小片1点、中世の瓦器椀ないし皿の胴部微小片1点、サヌカイト剥片・碎片6点、チャート剥片・碎片13点がある。このうちチャート剥片に分類したものには残核の可能性のある資料が含まれている。

表1 本田氏採集石器資料分類表

	石材	サヌカイト				チャート				珪質頁岩	水晶	小計
	分類	UF	RF	剥・碎片	石核	UF	RF	剥・碎片	石核	剥片	剥・碎片	
延野大原	点数			207点				26点				233点
	重量 (g)			147.78				42.47				190.25
鮎川西ノ宮	点数	2点		4353点	1点	3点	1点	702点	5点	7点	9点	5083点
	重量 (g)	1.61		3484.31	9.25	5.02	3.41	1019.85	55.23	10.46	13.09	4602.23
谷内A	点数			27点				926点	6点			959点
	重量 (g)			30.62				1289.27	127.4			1447.29
谷内B	点数			302点				38点	2点			342点
	重量 (g)			152.19				88.02	64.19			304.4
中分	点数							548点				548点
	重量 (g)							780.02				780.02
西納	点数			1701点				184点			3点	1888点
	重量 (g)			1034.45				250.53			10.02	1295
請ノ谷	点数			3点				9点				12点
	重量 (g)			1.09				7.24				8.33
築ノ上	点数			6点				13点				19点
	重量 (g)			4.81				12.91				17.72

※UF…使用痕ある剥片、RF…二次加工ある剥片の略

※UF、RF以外の製品を除く

高島氏の報告ではチャート製石鏃3点、サヌカイト製石鏃1点、チャート製楔形石器1点、チャート製スクレイパー1点が紹介されている。

以上、本田氏が遺物を保管している8遺跡の概要について述べた。遺物は畑地ないし水

田耕作土中に散布している例がほとんどであるが、現地調査の結果、遺物の散布にはある程度の集中地点を確認できる例の多いことが判明した。また遺物を含む表土層が客土である場合でも、客土自身が遺物包含層でないことは土壤の状態から判断してほぼ確実である。つまり、地表面に散布する遺物の集中地点直下において遺物包含層、および遺構面が存在する可能性が強いと判断される。

遺物散布地点、すなわち遺跡はすべて河川沿いに立地するという点で共通している。さらに河床からの比高差が約5～15m程度の比較的低い河岸段丘上先端部付近に立地するケースが多く、ある程度共通した立地環境を想定することも可能である。

さて、問題となるのは遺跡の存続時期についてである。採集された遺物のうち時期比定の参考となる資料から遺跡を分類すると、以下のように整理することができる。

- ①ナイフ形石器の採集された遺跡…延野大原遺跡、谷内B遺跡
- ②縄文土器の採集された遺跡………鮎川西ノ宮遺跡、谷内B遺跡、西納遺跡、築ノ上遺跡
- ③石鏃の採集された遺跡………延野大原遺跡、鮎川西ノ宮遺跡、谷内A遺跡、谷内B遺跡、西納遺跡、築ノ上遺跡
- ④剥片・石核のみが採集された遺跡…中分（谷内C）遺跡、請ノ谷遺跡

①のナイフ形石器は後期旧石器時代の所産であるが、延野大原遺跡、谷内B遺跡では同時に縄文土器片、あるいは石鏃の表採もなされており、縄文時代以降との重複が予想される。②は土器が小片であり詳しい時期の特定が困難な場合がほとんどであるが、遺跡の存続期間の一端が縄文時代にあることを示唆する。③の石鏃は縄文時代～弥生時代の所産であり、時代の判別は難しい。ただしこれまでに採集されている石鏃は高島氏の報告を参考にするならば長さ2cm未満の凹基鏃、ないし平基鏃が大多数を占めており、かつ弥生土器の存在を未だ確認していないことから、縄文時代に属する遺跡が多いものと予想される。④は現状では時期を特定することが困難である。

以上より②・③に分類した遺跡は少なくとも存続期間の一端が縄文時代にあることが予想されるが、時期比定の指標となる土器の絶対量が不足しており、遺物の種類からはこれ以上の言及が困難な現状にある。

現在表採されている遺物の9割以上は石器資料である。またその大半は今回紹介した剥片・碎片・石核が占める。この傾向はこれまでに相生町において確認されてきた遺跡群の評価を試みるうえで極めて重要であるが、縄文時代研究では石器資料が時期比定の指標として重視されることがほとんどなく、当該地域の遺跡群を評価するうえでの大きな障害となっている。石器研究遅延の理由として以下の点が挙げられる。(1)製品の形態変化が遅鈍である。(2)旧石器時代と比較し石器製作技術に一定の規則性を見出すことが難しい。(3)素材となる石材および地域によって製作技術に変化が生じている可能性が高い。(4)縄文時代

研究の大勢が編年研究、すなわち土器研究にあったという学史的背景を反映している、の主に4点である。このうち最大の障壁となっているのが(4)である。(1)・(2)はこれまでの学史的趨勢からみて敬遠されがちな分野であり、従って旧石器時代のように石器研究の深化が十分に成されていないというのが実状なのである。

ここではそうした従来の研究姿勢への見直しと反省の意味も踏まえ、相生町の遺跡群を評価するうえで不可欠となる石器剥片・碎片・石核の検討を以下試みる。

#### 4. 石材組成にみる遺跡の類型化

##### 1) 石材組成の遺跡間較差

本田氏は石器資料の表採に際して視覚的に美しい製品資料のみならず、長さ0.5～1 cm程度の微細な碎片にいたるまで丁寧に採集されており、表面採集とはいえ遺跡ごとの石器組成をある程度類推することが可能である。ここではまず石器の素材に着目し、その組成比を遺跡ごとに比較したい。

表2 石器素材の組成

	サヌカイト		チャート		珪質頁岩		水晶		小計
	割合	点数	割合	点数	割合	点数	割合	点数	
延野大原	88.8%	207点	11.2%	26点	0%	0点	0%	0点	233点
鮎川西ノ宮	85.7%	4356点	14.0%	711点	0.1%	7点	0.2%	9点	5083点
谷内A	2.8%	27点	97.2%	932点	0%	0点	0%	0点	959点
谷内B	88.3%	302点	11.7%	40点	0%	0点	0%	0点	342点
中分	0%	0点	100%	548点	0%	0点	0%	0点	548点
西納	90.1%	1701点	9.7%	184点	0%	0点	0.2%	3点	1888点
請ノ谷	25.0%	3点	75.0%	9点	0%	0点	0%	0点	12点
築ノ上	31.6%	6点	68.4%	13点	0%	0点	0%	0点	19点

表2は小稿で扱ってきた本田氏採集の剥片・碎片・石核のすべて、および剥片石器の一部を素材ごとに集計し、遺跡間で比較したものである<sup>(3)</sup>。大きく分類すると石材にはサヌカイト、チャート、珪質頁岩、水晶がある。なお県立博物館が所蔵する黒曜石製その他の石器類については今回除外しているが、上記の対象器種に関していえばその個体数は少量である。表2からは以下に示す3つのパターンが抽出できる。

パターンA (サヌカイト：チャート≒85：15～90：10) …延野大原遺跡、鮎川西ノ宮遺跡、谷内B遺跡、西納遺跡

パターンB (サヌカイト：チャート≒5：95～0：100) …谷内A遺跡、中分(谷内C)遺跡

パターンC (サヌカイト：チャート≒25：75～30：70) …請ノ谷遺跡、築ノ上遺跡

石器素材としてはサヌカイト、チャートのいずれか、あるいはその両者を選択する傾向が窺われるが、その組成比は大きく3つのパターンに分かれる傾向が認められる。パター

ンAはサヌカイトが9割前後を占める例である。珪質頁岩や水晶が極少量含まれる遺跡はすべてこのパターンAに属している。このうち鮎川西ノ宮遺跡では縄文前・後期の土器および縄文早期に属する可能性のある石器資料が、また延野大原遺跡と西納遺跡ではナイフ形石器と縄文時代以降に属する石鏃その他の資料が採集されており、いずれも複数時期の複合が予想される遺跡である。徳島県南部の地域では縄文時代早期前半段階に併行する上那賀町古屋岩陰遺跡でチャート製石鏃3点が検出されているが、サヌカイト製の石器は確認されていない<sup>(4)</sup>。一方、平成11年度に県埋蔵文化財センターによって調査の行われた阿南市椿町平松遺跡では弥生時代後期の土器に伴ってサヌカイト製石鏃が多く出土している<sup>(5)</sup>。このことから縄文時代の古い段階では主に地元で産出するチャートを剥片石器として利用していたが、遅くとも弥生時代にはサヌカイトへと石器素材の転換が成されたものと予想される。また藁科哲夫氏、東村武信氏、竹広文明氏、宮本一夫氏、谷若倫朗氏らによる近年の縄文時代石器流通論の研究成果から、縄文時代後期以降において瀬戸内を中心とする広い範囲で、サヌカイト製大型板状素材の遠距離移動の存在が明らかにされつつある<sup>(6)</sup>。パターンAにおけるサヌカイトの比率の高さは縄文時代後期以降における社会背景の変容を反映している可能性が強いと考えられる。ただしパターンAに属する3遺跡はいずれも複数時期の重複が予想されることから、今回の石器資料のみからの詳細な検討は困難といわざるをえない。当該地域におけるサヌカイトの比率増加時期の究明は今後の課題といえる。

一方、パターンBはチャートの割合が100%、ないしそれに準ずる高比率を占める遺跡である。いずれの遺跡も土器資料は発見されていないが、谷内A遺跡では石鏃26点が採集されており、その形態的特徴から縄文時代に属する可能性が高いものと判断される。すでに述べたようにチャートを主体とする遺跡は縄文時代でも古い段階に属する可能性が予想される。またサヌカイトの割合が極端に低いことは、ある程度時期が限定される可能性があることを示唆している。

パターンCはチャートが7割前後と主体を成し、これにサヌカイトが3割前後伴う例であるが、対象とした請ノ谷遺跡、築ノ上遺跡は採集資料の絶対数が20点未満と少なく、この結果が実状を反映しているのか否か判断が難しい。現段階ではパターンCの考察は保留すべきである。

以上3つのパターンのうちAとBは縄文時代における時期差を反映している可能性が高い。ただしパターンAに属する遺跡は上記の理由からこれ以上の検討を加えることには多くの困難と誤謬が予想される。よって以下ではパターンBに分類した谷内A遺跡の石器資料について検討を加えることにする。

## 2) チャート製石器の剥片剥離技術に関する考察

谷内A遺跡ではチャート製の石核6点、チャート剥片・碎片926点、サヌカイト剥片・

碎片27点が本田氏によって採集されている。図2は、石核の代表例2点である。1は長さ2.5cm、幅2.6~3.6cmを測るチャート製の河原亜角礫を用いた石核である。剥片剥出に際して打面調整を行った形跡はなく、自然面の稜線が無作為に多方向から加撃し、剥片を獲得している。目的とする剥片は長さ1.5~2.5cm、幅1.0~2.0cm程度とみられる。2は長さ3.9cm、幅2.0cmを測るチャート製の河原亜角礫を用いた石核である。角錐状を呈する自然礫の長軸両極端を打面とし、縦長の剥片を連続して獲得している。目的とする剥片は長さ2.1~3.9cm、幅0.6~1.2cm程度とみられる。

図3の3~7はチャート剥片である。うち3~6は腹面と背面で打面が転移する例。3は長さ1.2cm、幅1.7cm、厚さ2~3mmを測る貝殻状の剥片。背面には複数の剥離面が認められるが、加撃軸方向には規則性が認められない。4は長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ2mmを測る剥片で、3と同様背面は複数の剥離面で構成されているが加撃軸方向に規則性が認められない例。腹面左側縁には背面側からの二次的な折取り調整が成されており、ヒンジフラクチャーを生じている。5は長さ1.1cm、幅1.9cm、厚さ1~2mmを測る剥片で、背面側の加撃軸には3・4と同様規則性が認められない。6は長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ2~3mmを測る比較的小型の縦長剥片である。やはり背面側の加撃軸方向には規則性が認められない。

7は両極打法によって剥出された長さ2.5cm、幅1.1cm、厚さ7mmを測る縦長剥片で、両極からのリングの交差する部分においてフィッシャーの収束が認められる。背面側の加撃軸も腹面側とほぼ一致しており、両極打法による連続的な剥片の剥出が想定される。

8は長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ4mmを測る縦長剥片を素材とした二次加工ある剥片である。両側縁の細部調整はスクレイパーエッジに近い半急角度調整で、背面側にのみ施されたインバースリタッチによる調整である。背面の打点は腹面の打点に対して正反対の方向に認められる。なお背面中央部の剥離はバルブ除去を意図した二次的な調整である。

9・10はサヌカイト剥片である。9は長さ1.7cm、幅2.1cm、厚さ2~3mmを測る剥片で、背面加撃軸は腹面とは異なっている。縁端部側縁には二次的な折取り調整が成されており、ヒンジフラクチャーを生じている。10は両極打法によって剥出された剥片で、長さ1.2cm、幅2.3cm、厚さ5mmを測る。両極打法に起因する腹面両極からのリング交差付近では加撃圧の収束が認められ、ステップを形成している。

以上図2・3の具体例の検証から、谷内A遺跡における剥片剥離技術には最低でも石核で2つの類型、剥片で3つの類型が存在することを確認することができた<sup>7)</sup>。

まず図2の1・2で示した石核の例では、河原亜角礫を素材とし、その自然稜線を打点として不定方向に加撃を行う例(類型1)と、角錐状に近い河原亜角礫を素材とし、その両極端の自然面から連続的な加撃を行う例(類型2)の2者が存在することを述べた。類

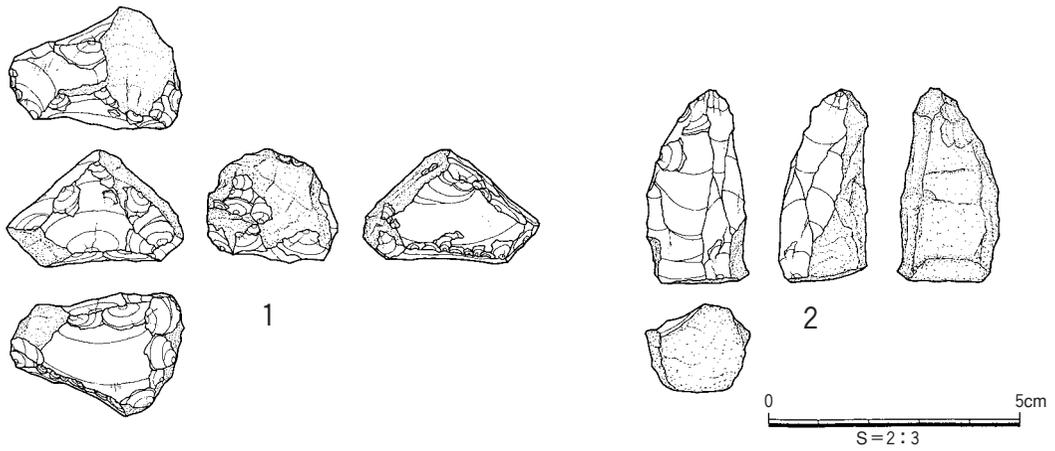


図2 谷内A遺跡採集チャート石核実測図

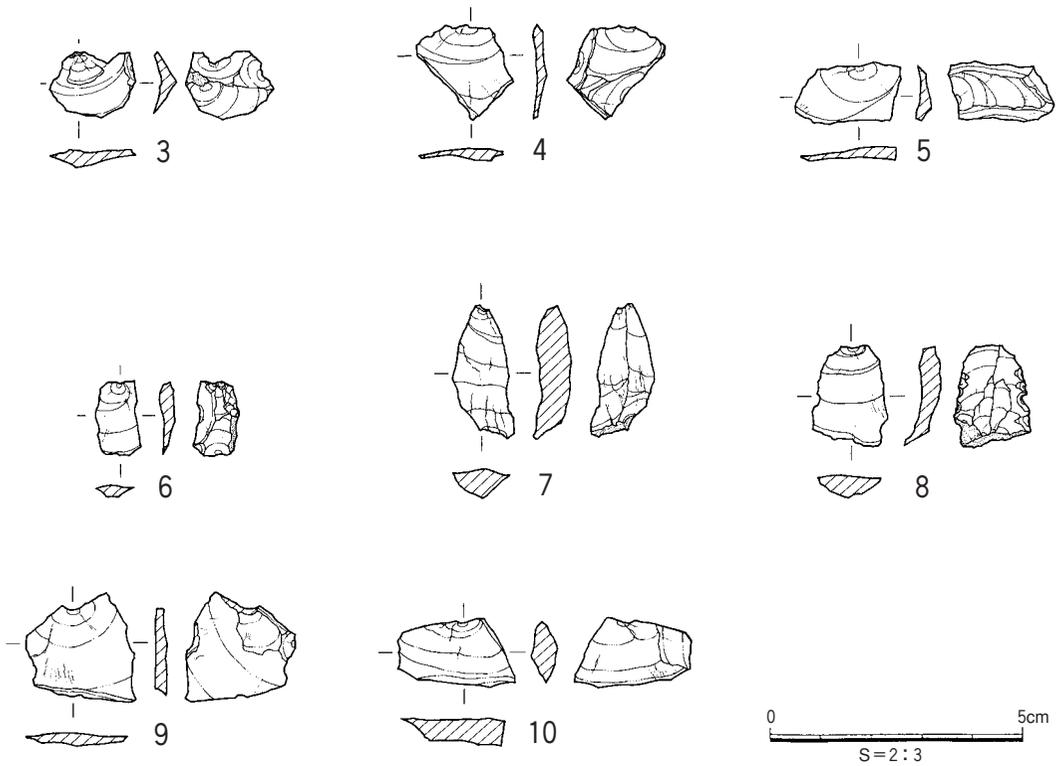


図3 谷内A遺跡採集一次剥片・石器実測図

(3～7：チャート剥片 8：チャート製二次加工ある剥片 9・10：サヌカイト剥片)

型2は素材となる原石形状のある程度の選択性と、剥片剥離技術に一定の規則性が認められることの2点から、類型1とは峻別することが可能である。

一方、剥片背面の加撃軸が多方向に及ぶチャート剥片3～6およびサヌカイト剥片9は石核類型1の技法に共通、あるいは準ずるものと判断される。これに対して8は背腹面間で加撃方向が正反対であり、石核類型2の剥片剥離技術に共通するものと考えられる。また図3の7・10で確認された両極打法による剥片剥離技術は石核では確認できていないものの、類型3として類型1・2とは区別すべきである。現在楔形石器として認定されている資料の中にも類型3により剥出された一次剥片や石核を含んでいる可能性があり、注意を要する。



写真5 谷内A遺跡採集のチャート製石核

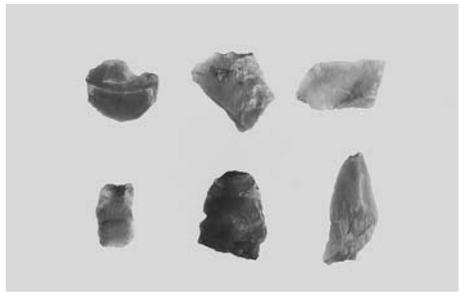


写真6 谷内A遺跡採集のチャート剥片

以上から谷内A遺跡のチャート剥片剥離技術には最低でも3つの類型が存在することを認識できた。このうち類型1と3はサヌカイト剥片にも同様に認められる技術であることから、類型2とは区別することが可能である。さらに剥片の大きさがいずれの類型においても長さ1.5～4.0cm、幅1～2cm程度と小型であり、目的とする製品として石鏃、石錐、楔形石器、搔器、削器、二次加工ある剥片、使用痕ある剥片などの器種に限定されることが予想されることから、器種による剥片剥離技術の相違を指摘することは妥当ではない。谷内A遺跡において抽出された類型1～3はそれぞれ異なった時期の所産である可能性を反映しているものと考えたい。チャート製石器を主体とする谷内A遺跡が縄文時代の古い段階に限定される遺跡か否かの検証は今後の課題であるが、類型2は谷内A遺跡において最も古い段階の技法、類型1と3は類型2よりも後出する技法である可能性が予想される。

## 5. 小 結

相生町における遺跡群の特徴は、これまでに採集された遺物のほとんどが石器資料である点にある。また石器の採集される地点が河岸段丘の先端部付近に位置する場合が多いことから、一遺跡内における石器製作場として共通した利用空間が存在する可能性も考えられる。今回の調査では石器素材の比較検討から大きく組成比には3つのパターンが存在することを確認し、これらが時期差を反映している可能性について述べた。さらにチャート

を主体とする谷内A遺跡の剥片剥離技術を具体的に検討し、3つの類型が存在することについても指摘することができた。徳島県南部の地域ではいまだ旧石器時代～弥生時代にかけての遺跡調査例が極めて少なく、上記の検討結果を比較することが困難な状況にある。また相生町の遺跡群についても存続時期の把握を現状において推定することが難しい。現在整理研究の最中である県立博物館の今後の研究成果を期待するとともに、将来、相生町周辺地域における縄文時代遺跡の学術的な発掘調査が実施されることを切に希望する。

## 謝 辞

小稿の執筆編集に際し、岡山真知子氏には多くのご助言を賜りました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

## 注および参考文献

- (1) 高島芳弘「那賀川流域の縄文遺跡調査グループ；徳島県那賀川流域における縄文遺跡の分布とその遺物」(『徳島県立博物館研究報告』第5号) 1995年
- (2) 各遺跡の写真撮影は中村豊が担当した。
- (3) 各遺跡採集遺物の個体数調査は中村豊、柏野壽一、本田義順、幸泉満夫が共同で行った。
- (4) 立花博『徳島県那賀郡上那賀町古屋岩陰遺跡調査概報』徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会 1970年
- (5) 佐野耕市「平松遺跡・楠ヶ浦遺跡・小島遺跡」(『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.11 1999年度) 2000年
- (6) 藁科哲夫「香川県金山サヌカイト産出地《原石産出地と原石分布圏》」(潮見浩編『探訪 縄文の遺跡 西日本編』) 1985年  
藁科哲夫・東村武信「石器原材の産地分析」(『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』) 1988年  
藁科哲夫・東村武信「石器原材の産地分析から推定した瀬戸内海地域を中心とした交流・交易の研究」(『内海文化研究紀要』第18・19合併号) 1990年  
竹広文明「中国地方縄文時代の剥片石器」(『考古学研究』第35巻1号) 1988年  
竹広文明「縄文時代の石器原材獲得—金山産サヌカイトをめぐる—」(『考古論集(潮見浩先生退官記念論集)』) 1993年  
宮本一夫「江口貝塚の成果と瀬戸内の縄文文化」(『江口貝塚Ⅱ—縄文後晩期編—』愛媛大学法文学部考古学研究室) 1994年  
谷若倫朗編『糸大谷遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996年  
谷若倫朗「瀬戸内の物流」の原形」(『伊達先生古稀記念古文化論叢』) 1997年
- (7) 図2・3掲載遺物の実測、および写真5・6の撮影は幸泉満夫が行った。